



faeeful love

運命の恋

R18

Main Character

攻め



藤堂 要／*Kaname Todo*

ホテル事業会社の社長
生真面目で誠実。太陽のような
おおらかさで、冷え切った冬夜
の心を溶かす。

受け



蓮見 冬夜／*Toya Hasumi*

男娼
打算的に動き、世の中を冷めた目で
見ている。過去のトラウマから人を
愛することに臆病になっていたが…



Sub Character

※全員受けとの絡み（性描写）あり



怜央／*Reo*

男娼／冬夜の同僚



モブ A

冬夜の太客



モブ B

冬夜のトラウマの元凶

「はあっ、はあっ、はあっ……もう……っ、でちゃん、そう、だよ……っ、冬夜くん……っ」

シーツの上に組み敷かれ、大きく開いた脚の間を陣取る男の前後する腰が、徐々に速度を上げていく。圧迫感がいつそう強まったことから、宣言通り近いのだろうかと当たりをつけ、甘えるような声で男の名前を呼んだ。

「……さいごは、後ろか、ら……っ、めちやくちゃんに、突かれて……っ、いき
た、……っあ、はあ、ん……っ」

耳元に唇を寄せ、喘ぎ声混じりに乞うと、ぐうっとまた質量を増した肉棒に内臓が圧迫され、息が詰まる。天に召されたかのような恍惚とした表情で「僕たち、同じ気持ちだったんだね」と笑いかけてくる男に微笑み返しながら「一度、抜いてもらえますか？」と名残惜しむような色を添えて催促した。

「ああ、ごめんね」

慌てて身を起こした男の肉棒の張り出した部分が、孔の縁をひっかく。それにさえも感じてしまう素振りを見せると、男はたまらないといった表情で喉を鳴らした。後ろ髪を引かれるような仕草で身体を反転させると、すぐさま尻を驚掴まれ、萎みかけていた孔に、容赦なく栓をされる。自分本意としか言いようのない律動に合わせ、相手の支配欲を満たすべく、甘ったるく鼻にかかった喘ぎ声を惜しみなく聞かせる。

この男は、多少大袈裟に見えたとしても、分かりやすい仕草を好む。中でも、甘える仕草が最も効果覲面だ。どちらかといえば早漏なほうで、スタミナはあまりない。いつも必ず正常位で始まり、最後は後背位の体勢で、相手の体をこれでもかとベッドに沈み込ませ、犯し尽くさんばかりの荒々しいセックスをする。そして、やたらと唇を吸いたがる。

「……ア、あ……っんあ……キス、して……っん、む」

首をまわし、無理な体勢にもかかわらずキスを乞うと、すぐに口を塞がれ、呼吸を奪われる。思惑通り、その仕草は男の眼鏡に叶ったようだ。

後背位にするキスは苦しい。けれど、こちらが苦しいほど中が締まるからと、それを好む男は多い。

「……あ、んむっ……あ、は、あ……も、で、ちゃ……」

「もう出ちゃうの？ まだ、こっち、触ってないのに？」

「ひんん……っ、あ、や……そこ……っ、さきっぽ、ぐりぐり、だめえ……っ」

淫乱だね、と蔑まれながら、乱雑な手つきで先端を捏ねまわされると、ぴゅるっと精液が溢れて飛び散った。それは極めて少量で、絶頂にはまるで届かない解放だったけれど、こちらの様子などまったく気にもかけない男の支配欲は擦られたようだ。それに輪をかけるべく、破裂寸前の肉棒が自分の体内を蹂躪する様子を、男の好む拙さで実況する。

「ひああ……っ、そんな、あ……っ、おく、まで……っ、ずっぽずぽ、しちゃ、

あ、ああん……っ」

「ああ、もう……っ、本当に……っ、出ちやい、そう、だよ……っ、出してい
いよね……っ？ 冬夜くんは、なかに出されるの……っ、大好きだもん、ね……
っ」

「す、き……っ、だいすき、だからあ……っ、おくに、濃いのお……っ、た
くさん、くださ——ひあうっ！」

どちらゆん、と最奥まで挿し込まれた肉棒が、ぐうつと質量を増して、これでもかと内臓を押し上げる。ぴったりと肌と肌が密着した状態で相手の腰が痙攣し始めると、こちらの体までびくびくと跳ねる。

「……あ、ひい、ん……っ、だ、め……っ、だめ、え……っ、もう……っ、い
っちゃ、う……っ」

か細い声で訴えることで、同時に達していることを演出しながら、さりげなく性器をシートに擦りつけるも、絶頂には至らない。けれど、そんなことはこ

の男にとってはどうでもいいことだ。

「あ、あ……あん……っ、なか、いっぱい、出てる……」

シートに頬ずりをしながらうっとりつぶやくと、乱雑な仕草で頬を鷲掴みにされ、嫌な角度に首が曲がる。顔を顰めてしまわぬよう細心の注意を払うも、目を合わせるまでもなく、独り善がりな仕草で唇を塞がれた。

乱れた呼吸を整えるまでもなく始まった、舌を吸われる濃厚な口吸いに、酸欠で頭がぼうつとする。体内に埋まったままの肉棒が、ふたたび硬く芯を持ち始めるのを感じながら、片手を伸ばし、汗ばんだ男の髪に指を絡ませ、耳を擦ると、ようやく一方的な口吸いから解放された。

「……残念ですが、そろそろ時間です」

延長もできますが、と男の好む控えめな仕草で促すと、「うーん……」と歯切れの悪い反応が返ってきた。思わず目を瞬く。鼻屑にしている客の一人であるこの男はこのところ顔を見せておらず、今日は久しぶりの来館だった。だか

ら、ねだれば簡単に延長になるだろうと踏んでいた。

「……お仕事、お忙しいんですか？ 久しぶりに来てくださったから、今日は朝まで愛してもらえと思っていたので……残念です」

媚びるような仕草で擦り寄るも、男はいつものように「そんな可愛いことを言われたら、離れたくなくなっちゃうよ」とだらしなく顔を弛めることなく、いっそう悩ましげな声を出す。

「延長したいのは山々だけど……人気者の君を独り占めするのは、気が引けるなあ……」

「貴方は特別なお客様ですから、多少の融通は利かせますよ？」

煮えきらない物言いから、簡単に察しはついていたけれど、今ここで俺にできることは、こうしてしおらしく振る舞うことだけだ。

改めて、男の容貌を盗み見る。全体的にみずぼらしくなったことは、出迎えた瞬間に感じていた。少し痩せたようにも見えるし、最も顕著なのは毛髪の量

だ。相当なストレスに晒されているのだろうと、容易に想像がつく。

「……これからも、時々でいいので、お顔を見せに来ていただけると嬉しいです」

それだけと言って、自分の体のメンテナンスにまで気が回らないことを顕著に表している男の乾燥した唇を啄み、潤すように舌で撫でる。唇が触れ合う距離で「あと一回だけ」と腰を揺らめかせると、萎えかけていた男のものがわずかに硬度を上げ、反り返った。張り出した雁首がちょうど感じやすい場所を抉ったので、少し大袈裟に体をびくつかせ、甘えるような声を聞かせると、辛抱ならないといった仕草で男が覆いかぶさってくる。

「……貴方の顔を見ながらしたいです。キスも、たくさ、ん、ン……っ」

唇も舌も食べ尽くすようなキスに応えながら考えるのは、空いた穴をどう埋めるのかの算段だ。